

10月9日(日) 15:00~16:00 第1会場(会議棟 2階 大ホール)
座長：富永 敦子(一般社団法人 宮城県薬剤師会 副会長)

SL1-1

おかえりモネから学ぶこれからの地域医療

たのうえ ゆうすけ
田上 佑輔



医療法人社団やまと 理事長

震災から10年以上経ち災害以降の地域の移り変わりと同時に、震災前から地方が抱える少子高齢化、人口減少、医師偏在の課題が顕在化するのを在宅医療に関わる医師という立場で見てきました。

2013年に宮城県登米市に訪問診療専門の診療所を開業して、地方と都市部を循環しながら持続可能な地域医療を目指す活動を始めて10年近くになります。そもそも「医師が少ない地域でも患者家族や地域が安心できる地域医療」と大学を辞めて始めた診療所でしたが、開業後10年実践を繰り返していく中で「患者さんやご家族だけでなく地域さらには共に働くメンバーの個々の自己実現を目指す」という文化が自分たちチームの中に生まれつつあることを実感しています。

不易流行、変わりゆくものに合わせて変化しなければいけない事と地域で変わらない価値観や信念、想いがあります。宮城県登米市が舞台となったNHK朝の連続ドラマ小説「おかえりモネ」ではそのような個々の想いと、変わる事に対しての不安や何かを取捨選択することに伴う責任を軽く感じさせ優しく背中を押してくれる出会いや寄り添いが描かれました。

患者さんやご家族との出会いから地域との出会い、寄り添いを通して私たちのチームが何を感じ、さらにはこれから何を目指しているのか、医療の進化やテクノロジーの進化と共に「想いを力に変える」実践が何を意味するのかお話できればと思っています。

1980年5月9日 熊本生まれ。

経歴

- ・1999年 3月 鹿児島私立ラ・サール高校卒業
- ・2005年 3月 東京大学理科Ⅲ類卒業
- ・2005年 4月 千葉県国保旭中央病院入局(初期研修医)
- ・2007年 4月 東京大学医学部付属病院腫瘍外科入局
- ・2013年 4月 やまと在宅診療所登米、やまと在宅診療所高島平設立
- ・2014年 12月 医療法人社団やまと設立

現在：医療法人社団やまと理事長。宮城、神奈川に6診療所を構える。

主な活動

1980年熊本生まれ。東京大学医学部卒業、外科医を志し千葉県国保旭中央病院で経験を積みながら、アメリカやカナダのさまざまな病院を見学。この過程でがん患者さんに接する機会が多かったため、彼らに貢献したいと、2007年から東大医学部附属病院腫瘍外科の医局で研究を始める。そんな折、2011年の東日本大震災での災害医療ボランティア活動で災害地域へ入り、医師不足の地域での継続的な支援の必要性を感じる。また、東大病院に在籍していた際に、末期がんで手術が不可能な患者への「看取り」の重要性を感じ、住み慣れた場所で最期を迎えたいと願う患者や家族の力になるかと決意。2年後の2013年、宮城県登米市と東京都板橋区高島平の2か所で、安井佑と共にやまと在宅診療所を開業。他に医療で日本を良くするチームGMJを作り、同時に医師からの情報発信メディア「coFFee doctors」を運営。地域の方々が安心して生活できる登米市になるようにと、2014年6月「Café coFFee doctors」もオープンし、医療・介護相談を無料で行い、定期的にOMC(オープン・メディカル・コミュニティ)勉強会を開催している。日々の診療以外にも地域住民や行政と関わり、地域住民やコメディカル、行政も巻き込んで地域の医療の質を上げる活動に取り組み、登米市の地域包括ケアアドバイザーを務める。都市⇄地方、両方に拠点を持つことによって医師が双方でキャリアを積むことができる「医師循環型」キャリアモデルの確立に奔走し、2017年に「やまとプロジェクト」を発足。都市⇄地方を循環する医師の働き方モデルを医師不足、地域医療再生の一つの解決策として提案している。これからの在宅診療・地域医療についての勉強会、講演を行っており、多数のメディアに活動が取り上げられている。2021年NHK朝の連続ドラマ小説「おかえりモネ」のモチーフとなる。

略歴

熊本生まれ。東京大学医学部卒業後に千葉県国保旭中央病院での研修医を経て東京大学医学部付属病院腫瘍外科に入局する。東日本大震災でのボランティア活動を機に2013年に宮城県登米市と東京にてやまと在宅診療所を創設する。現在は医療法人社団やまと理事長に就任。診療以外にも地域住民や行政と関わり、2014年より登米市地域包括ケア推進アドバイザーに任命されている。2017年に「やまとプロジェクト」を発足。都市と地方を循環する医師の働き方モデルを医師不足、地域医療再生の一つの解決策として提案している。これからの在宅診療・地域医療についての勉強会、講演を行っており、多数のメディアに活動が取り上げられている。その取り組みが2021年NHK朝の連続ドラマ小説「おかえりモネ」のモチーフとなる。

SL2-1

一般住民バイオバンクを活用したファーマコゲノミクス研究と個別化薬物療法への応用

ひらつか まさひろ
平塚 真弘



東北大学大学院薬学研究科 准教授 / 東北大学東北メディカル・メガバンク機構 /
東北大学未来型医療創成センター / 東北大学病院薬剤部

医薬品の効果や副作用発現には遺伝的な個人差が存在し、患者個々に効果かつ安全性の高い薬物療法を実施するための、予測性の高いゲノムバイオマーカーの同定が求められています。一方で、遺伝子配列が複数カ所異なってもタンパク質の機能には全く影響がない場合や、逆に遺伝子上の一塩基多型のみでタンパク質の機能が著しく変化する場合もあり、ゲノム解析だけでなく、アミノ酸配列が一部変化したバリエーションタンパク質の機能変化解析が極めて重要です。特に、薬物代謝酵素は医薬品の体内動態に関わる最も重要な分子であり、それらの遺伝的バリエーションがヒトの医薬品に対する効果や副作用発現の個人差に大きく影響すると考えられています。しかし、そのバリエーションが実際に、どの程度機能変化を起こすかについては不明な部分が多く、ファーマコゲノミクス (PGx) 検査が臨床応用されているものは一部にすぎません。したがって、今後、個人のゲノム解析情報が蓄積しても、それらに由来するバリエーション酵素の機能変化が正確に評価・予測されなくては、PGx 検査のゲノム医療への応用は困難を極めます。

東北大学は、2011年から東北メディカル・メガバンク機構を設置し、15万人の一般住民を対象としたコホート研究やバイオバンク整備を通して、我が国の個別化ヘルスケアの社会実装に挑戦しています。特に最近では、14,000人規模の全ゲノム解析に成功し、それらの遺伝子配列情報はデータベースで一般公開されています。演者は、この大規模な一般住民バイオバンクを活用して、個々の遺伝子多型情報を基に、薬物代謝酵素バリエーションの網羅的な機能変化解析を行ってきました。この研究は薬物代謝の個人差のメカニズムを解明する上で非常に重要なツールを生み出します。将来的に、極めて精度の高い「遺伝的酵素活性予測パネル」が構築できれば、それを基に患者の薬効や副作用発現を予測し、個々に最適な医薬品選択や投与量調節を行う個別化薬物療法への臨床応用が期待できます。

これまでも、多くの研究者や薬剤師が患者個々の「薬物応答性」と「ゲノム配列」の関連性を精力的に研究してきました。いくつかの医薬品に関しては、ゲノム情報を活用した個別化薬物療法が可能なものも出てきています。このような状況の中で、多くの薬剤師は、「PGx」という新しい概念を日常業務の中で意識せざるを得ない状況になっているかもしれません。

学歴

平成 3年 東北大学薬学部卒業
平成 8年 東北大学大学院薬学研究科博士課程修了 博士(薬学)

職歴

平成 8年~10年 北大学大学院医学系研究科病態代謝学講座 助手
平成 10年~14年 東北大学病院薬剤部 薬剤師・試験研究室室長
平成 14年~18年 東北薬科大学臨床薬理学教室 講師
平成 18年~19年 スウェーデン・カロリンスカ研究所ファーマコジェネティクス分野 客員研究員
平成 19年~20年 東北薬科大学薬物治療学教室 講師
平成 20年~現在 東北大学大学院薬学研究科生活習慣病治療薬学分野 准教授
平成 20年~現在 東北大学病院薬剤部 (兼)
平成 24年~現在 東北大学東北メディカル・メガバンク機構 (兼)
平成 30年~現在 東北大学高等研究機構未来型医療創成センター (兼)

受賞歴

- 1) 平成 14年度 日本薬学会奨励賞
- 2) 平成 22年度 日本薬物動態学会奨励賞
- 3) 平成 24年度 日本医療薬学会学術貢献賞
- 4) 平成 28年度 日本薬学会学術振興賞

10月10日(月・祝) 9:30~10:30 第1会場(会議棟 2階 大ホール)
座長： 巒 基治(一般社団法人 宮城県薬剤師会 副会長)

SL3-1

「診断時からの緩和ケア」における薬剤師の役割

いのうえ あきら
井上 彰



東北大学大学院医学系研究科 緩和医療学分野 教授

緩和ケアとは、従来誤解されがちであった「末期がん患者への対症療法」のみではなく、さまざまな辛さに悩む患者と家族に対して、より早期から問題に対処することでその方々のQOLを改善させる多面的なアプローチである。2018年から第3期となった「がん対策推進基本計画」では、「がんとの共生」分野の重要施策として「がんと診断された時からの緩和ケア」が掲げられており、がん患者に関わる全ての医療者は緩和ケアを正しく理解する必要がある。

進行がん患者における「早期からの緩和ケア」の有用性を世界的に知らしめた Temel らの研究では、専門的緩和ケアチームが担った役割として「患者の価値観をふまえた治療選択の支援」や「患者教育」、「アドバンス・ケア・プランニング」などが示されている。例えば、終末期近くで全身状態が悪化した患者に、殺細胞性抗がん剤による化学療法は有害無益であるが、同研究の対照群（がん治療医のみに治療を委ねられた患者群）では、死亡前2カ月間での化学療法実施率が緩和ケア介入群と比べ有意に高かった。我が国でもその傾向は認められ、多くのがん患者は無益な抗がん治療に苦しめられている。近年では、分子標的治療薬や免疫チェックポイント阻害薬の発展により、がん治療は以前よりも長く、かつ終末期近くまで継続されている実態があるが、その状況において薬剤師に期待される役割は、リスク&ベネフィットバランスが適切に判断された（かつ患者・家族にも十分な情報提供がなされた）治療選択がされているか、適切な副作用対策が行われているか、効果が乏しくなった無為な抗がん治療を継続していないか、などを専門の見地から評価し、必要に応じて治療医もしくは患者に情報提供することと考える。

一方、疼痛緩和などの対症療法も緩和ケアの重要な役割であることには変わりはなく、オピオイドや鎮痛補助薬の種類が増え治療が複雑化している昨今、患者への服薬指導や薬物相互作用の確認も従来以上に重要となっている。また、終末期に必発と言える「せん妄」への対策として、不適切な睡眠剤の使用などにも目を光らせる必要がある。近年、質の高い在宅診療が受けられる地域も拡大しており、上記のニーズは病院内に留まらない。緩和ケア領域においても薬剤師に期待される役割は非常に大きいと言える。

学歴・職歴

1995年 3月 秋田大学医学部卒業
1998年 6月 国立がんセンター中央病院 内科レジデント
2001年 6月 医薬品医療機器審査センター 審査第一部審査官
2002年 7月 東北大学病院 呼吸器内科医員(2003年3月より助教)
2009年 12月~2010年 2月 Gandarra Palliative Care Unit (豪州、Ballarat) 短期留学
2012年 7月 東北大学病院 臨床研究推進センター 特任准教授
2015年 5月~東北大学大学院医学系研究科緩和医療学分野 教授

賞与

2009年 11月 日本肺癌学会篠井・河井賞
2010年 4月 日本呼吸器学会奨励賞
2013年 2月 第9回日本学術振興会賞
2015年 7月 日本臨床腫瘍学会 Annals of Oncology 賞

所属学会

日本緩和医療学会(理事、代議員)、日本臨床腫瘍学会(専門医、指導医、協議員)、
日本肺癌学会(評議員)、日本呼吸器学会(専門医、指導医、代議員)、日本内科学会(認定医)、
日本癌学会、ASCO、ESMO、IASLC